はじめに
―「移住定住」を深堀する―

島添 貴美子
KIMIKO SHIMAZOE

■『都萬麻』第2期、始動

本誌は、富山県高岡市と富山大学芸術文化学部の連携協定の一環として、２０１２年より発行が始まった『高岡芸術文化都市構想　都萬麻』の第２期第１巻である。第1期全4巻では、芸術文化学部内外から幅広く寄稿いただき、高岡市を中心とする文化・生活・産業等に関わる特徴はほぼ網羅された。そこで、第2期では特集と銘打って、テーマを絞り込み、各方面でそのテーマに取り組んでおられる方々から寄稿いただくことで、様々な視点から、特集テーマを深堀する。

本巻のテーマは、移住定住である。富山県高岡市では市長政策部都市経営課が移住定住、中でも若者の転入、定住促進プロジェクトを進めてきた。移住ポータルサイト（＊1）やフェイスブック（＊2）の開設、移住者受け入れ企業の確保、移住セミナー等を開催し、２０１７年には同課内に移住定住推進室も設置された。同年、これらの試みが評価され、ＪＯＩＮ（一般社団法人移住・交流推進機構）による２０１７年版の「おすすめ移住・交流先16選」（＊3）に選ばれている。

こうした状況の背景には人口減少の問題が密接に関わっている。２０１４年5月、日本創成会議の人口減少問題検討分科会が「２０４０年には全国１８０

＊1 高岡市移住促進サイト「あっ、たかおかで暮らそう！」
http://takaokalife.jp/

＊2 高岡市移住促進サイト「あっ、たかおかで暮らそう！」
https://www.facebook.com/takaokalife/

０市区町村の半分の存続が難しくなる」との予測をまとめた（＊4）。同年7月には、国土交通省も「国土のグランドデザイン２０５０～対流促進型国土の形成～」の中で、２０５０年には、「現在の居住地域の６割以上の地点で人口が半分以下に減少し、うち2割が無居住化。地域消滅の危機」（＊5）と急激な人口減少と少子化を予測している。興味深いことにこれらの予測は、へき地だけでなく都心であっても、この問題に直面することになると指摘している。人口減少は単に人口が少なくなるというだけではなく、教育文化、産業経済、保健衛生といった住民の日常生活を支える基本条件を維持することが困難になることを意味する。今や人口減少に関わる問題は都会か田舎かに関わらず、日本国中が関わらざるを得ない問題となっている。

■ソフト面（ひと）からみた移住定住

本巻ではこうした現状をふまえ、移住定住のソフト面（ひと）に焦点をあてて深堀する。

まず、松浦義昭氏の「地域経済循環図から見た富山県内市町村」は統計資料というマクロな視点からみた移住定住の問題をあぶりだす。松浦氏が駆使するのはＲＥＳＡＳ（地域経済分析システム）である。ＲＥＳＡＳ（＊6）とは、２０１５年より経済産業省と内閣官房（まち・ひと・しごと創生本部事務局）が地方創生を後押しして提供している分析システムで、松浦氏自身、内閣府地域経済分析システム専門委員として、ＲＥＳＡＳによる地域活性化に取り組まれている。

続く、富山大学地域連携推進機構・富山県舟橋村生活環境課と安嶋是晴氏

＊3 ＪＯＩＮ「おすすめ移住・定住先16選～２０１７年版」
https://www.iju-join.jp/feature/file/038/

＊4 日本経済新聞電子版２０１４年５月８日付「自治体、２０４０年に半数消滅の恐れ、人口減で存続厳しく各種推計、政策見直し迫る」
https://www.nikkei.com/article/DGXNASFS08020_Y4A500C1EE8000/

＊5 国土交通省「国土のグランドデザイン２０５０概要①」
http://www.mlit.go.jp/common/001047114.pdf

＊6 RESAS https://resas.go.jp/

は、それぞれ子育て世代、職人の移住定住に焦点をあてて寄稿いただいた。

富山大学地域連携推進機構・富山県舟橋村環境課の「人口減少はビジネスチャンス　新たな地域づくりによる移住・定住」は、富山大学地域連携推進機構から金岡省吾氏と藤田敬人氏、そして、富山県舟橋村から吉田昭博氏、廣瀬美歩氏、中井明日香氏による共同執筆で、富山県舟橋村を例に産官学金労言で協働する子育て支援を分析したものである。産官学金労言とは、産業界・大学・金融機関・労働団体・言論界を意味する（＊7）。ここで注目されるのが、CSV（Creating Shared Value：共通価値の創造）という移住定住政策のトレンドである。首都圏では民間企業が単独で、地域ぐるみの子育て支援の商品化に成功しているが、このビジネスモデルはそのまま舟橋村に適応することができない。舟橋村では、産官学金労言の協同による子育て支援が試行錯誤されている。

安嶋氏は、長年にわたって輪島のまちづくりに関わってこられた経験をもつ。「輪島における漆器業従事者の移住定住」は、輪島塗で全国的に知られる輪島市を事例とし、職人さんの移住定住を考察した論考である。安嶋氏によると、輪島市は過疎化と漆器生産額の減少の中で、漆器業従事者数は、高齢化が進んでいるものの、漆器生産額ほど減少していない。その理由として、安嶋氏が注目しているのが、輪島漆芸技術研修所が担っている教育システムと輪島塗技術後継者奨励金にみる雇用促進策である。輪島市への移住定住の観点からこれらの政策をみると、人材を産地（輪島市）にとどめるさらなる施策は必要とはいえ、輪島塗という伝統工芸の技術の伝承の点からみると、若者を惹きつける魅力となっていることが推測される。

＊7　まち・ひと・しごと創生総合戦略（2015改訂版）https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/info/pdf/h27-12-24-siryou2.pdf

よりミクロに移住者と受け入れ者に注目しているのが、古池嘉和氏である。古池氏は「『人』が移り住むということ」の中で、移住定住政策は数値目標化されやすく、そのために様々な補助制度を設けることで移住者に選ばれようとする獲得合戦が激化していると指摘する。このような現状の中で、本当に重要なことは、移住者と受け入れ者の間の、生身の人間同士の新たな交流である。実際に、愛知県豊田市の中山間部につくられた「おいでん・さんそんセンター」ができたことで移住定住が促進しているが、その理由は、地域での信頼が厚く、行政の手続きにも明るい元行政職員A氏の存在である。古池氏の事例は、こうした「つなぎ手」人材が、移住定住促進の鍵となっていることがわかる。

移住者と受け入れ者との交流を当事者の視点から論じているのが、次に挙げる荒井里江氏と加納亮介氏である。

『高岡芸術文化創造都市構想　都萬麻03』（＊8）で登場した「高岡まちっこプロジェクト」は始まって約6年半が経過した。荒井氏はプロジェクトに参加している芸術文化学部生たちから「荒井さん、大好き！」と尊敬されるプロジェクトメンバーの一人である。荒井氏の「まちづくりとコミュニケーション」は、荒井氏自身の目線で、プロジェクトを振り返り、その後の展開を描いたものである。荒井氏によると、少子高齢化と空き家増加問題をきっかけに生まれた「高岡まちっこプロジェクト」が最初に気が付いたことは、「高岡市は22歳までの人口は減少していないが、それ以降に減少する」ということである。そこから、「大学があるおかげで他県からの若者の流入があるが、卒業後に流出してしまう」と仮説を立てて始まったのが、大学生たちと町の人たちとの対話である。その中

＊8　服部恵子「高岡まちっこプロジェクト」武山良三編『高岡芸術文化創造都市構想　都萬麻03』富山大学出版会、134－142頁

で、荒井氏が繰り返し指摘するのはワークショップの重要性である。荒井氏が指摘するワークショップの重要性は、移住者とまちの人、さらに、まちの人同士が顔を合わせて話をすることの重要性である。現代社会において、隣に誰が住んでいるかわからないのが当たり前、インターネット上でメッセージのやり取りをするのが当たり前である。ワークショップのように、顔をつき合わせて話をする機会を作ることこそ、まちづくり、ひいては移住定住になくてはならない基本の行動といえる。つまり、顔をつき合わせることで、「旅の人」(＊9)(移住者)とまちの人との間に、安心と信頼の関係を作り出すことが、定住の前提になるのである。

移住してくる旅の人たちは、それぞれに異なる生まれ育ったバックグラウンドを持っている。加納亮介氏の「まちなかを継ぐ」は、大都市で生まれ育った一人の若者からみた、移住するということの意味が率直に綴られている。加納氏の移住は、調査のために、ちょっと住んでみたという足掛けではない。そんな加納氏からのメッセージは、誤解を恐れずに一言で言うならば、「移住定住とは、第二の故郷で生きること」である。加納氏は、さまざまな仕掛けをまちなかの人々や富山大学芸術文化学部生たち、そして彼が所属する東京工業大学生たちと、まちなかに作っていく。そこには、高岡のまちなかを舞台として、まちなかを超えて広がる人的ネットワークの中で受け継がれていくまちなかの歴史と、新たに作り出される歴史がある。加納氏の移住定住の例は、若者の移住定住の一つのあり方を提示していると言えるだろう。

高岡市内における芸術文化学部学生の活動からは、学生サークル「高岡ＨＵＢ(ハブ)計画」の生みの親であり、顧問である内田和美氏よりコラムを寄稿いただいた。芸術文化学部は1学部1学科5コースからなる。現在の高岡ＨＵＢ計画の中心は、芸術文化キュレーションコースに所属する学生たちであるが、造形芸術コース、工芸デザインコース、情報デザインコース、建築デザインコースに所属する学生たちも少なくなく、幅広い分野から高岡駅地下の活性化に取り組んでいる(＊10)。

最後に、松田愛氏の「キュレーションのつくるまちの魅力」は、日本各地で開催されている「芸術祭」を例に、芸術祭を訪れる人たちだけでなく、それを迎える地元の人たちも、芸術祭をきっかけに、地元を再発見していると指摘する。芸術祭の可能性とは、「美術館」という空間から作品を取り出し、「地域」という空間に作品を展示することによって生じる可能性である。日本ではまだ20年足らずの試みであり、芸術祭による地域の経済効果や活性化が一時的なもので終わるかどうか、結論を見るのはまだ先のことである。また、芸術祭というものが、地域に根付くかどうか、あるいは、地域を活性化させるような芸術祭のあり方とはどのようなものか、まだまだ模索は続いている。

このように、本巻は、「ひと」からみた移住定住に焦点をしぼり、マクロ(統計)とミクロ(フィールド)の両面から深堀する。本巻の論考一本一本が、移住定住の抱える様々な問題に対して、試行錯誤しながら打開していこうとしている。その心意気を読み取っていただきたい。

＊9「よそから来た者、よそへ出た者」を意味する富山方言。民俗学的には、村の外は神仏の守護を得られない危険な世界である。旅が一般的ではなかった中世以前の日本では、旅とは危険なものと考えられた。故郷の村を離れた者が、他村で呪いにかけられた、人身御供となった、といった民間伝承は日本各地に残っている。

＊10 芸術文化学部は２０１８年度より、美術・工芸コース、デザインコース、建築デザインコース、地域キュレーションコースの４コースに再編される。